



報 仇  
繪 本 高 尾 外 傳  
二

13  
3018  
2



門へ 13  
3018  
巻 2

東漢源流 考槃餘事 口説 摺明 全四冊 大房 書齋 筆 用 之 書 也

題 画 詩 剛 全二冊 一題 再 詩 選 全壹冊

吳 魏 先 生 撰 輯

書 畫 比 白 宜

白 紙 摺 明 朝 畫 快 入 本 全 三 冊

唐 用 摺 懷 中 本 全 部 一 冊 致 爲 低 中 練 行 又 一 摺

書 家 必 用 の 小 冊 諸 君 子 常 小 案 上 小 滿 置 ぬ ず 之 於 用 本 冊 之 綱 左 右 詩 題 重 數 之 類 絶 句 聯 句 六 亦 更 多 數 字 中 外 詩 少 別 類 小 冊 之 類 其 在 在 得 之 之 類 實 小 書 之 類 六 之 君 子 必 携 之 易 易 之 珍 寶 也 可 謂 小 冊 也

書 肆

大 阪 北 久 賢 寺 町 心 齋 橋

前 川 源 七 郎 梓

繪 本 報 仇 高 尾 外 傳 卷 之 一

江 戸

楚 滿 人 著

昭和 九 年 七 月 十 二 日 購 求

第 四 回

浮屠氏の方便道家の寓言と偽りの証言の類と善  
をすめ思とあらず人の為る忘言るをたみむとす  
ぬねども。こまひとまわち引久く貞女列婦ををり  
深きエとのあふもさくはダ佛の亡父と又この世なる  
はらゆるころをけるあさりか花ハかてるを近くよび終  
るは猫まじら ちま 一このころやそることも今春ハモウ十  
六りがりまを獨りでもおしきまひといひて男たりのことあ

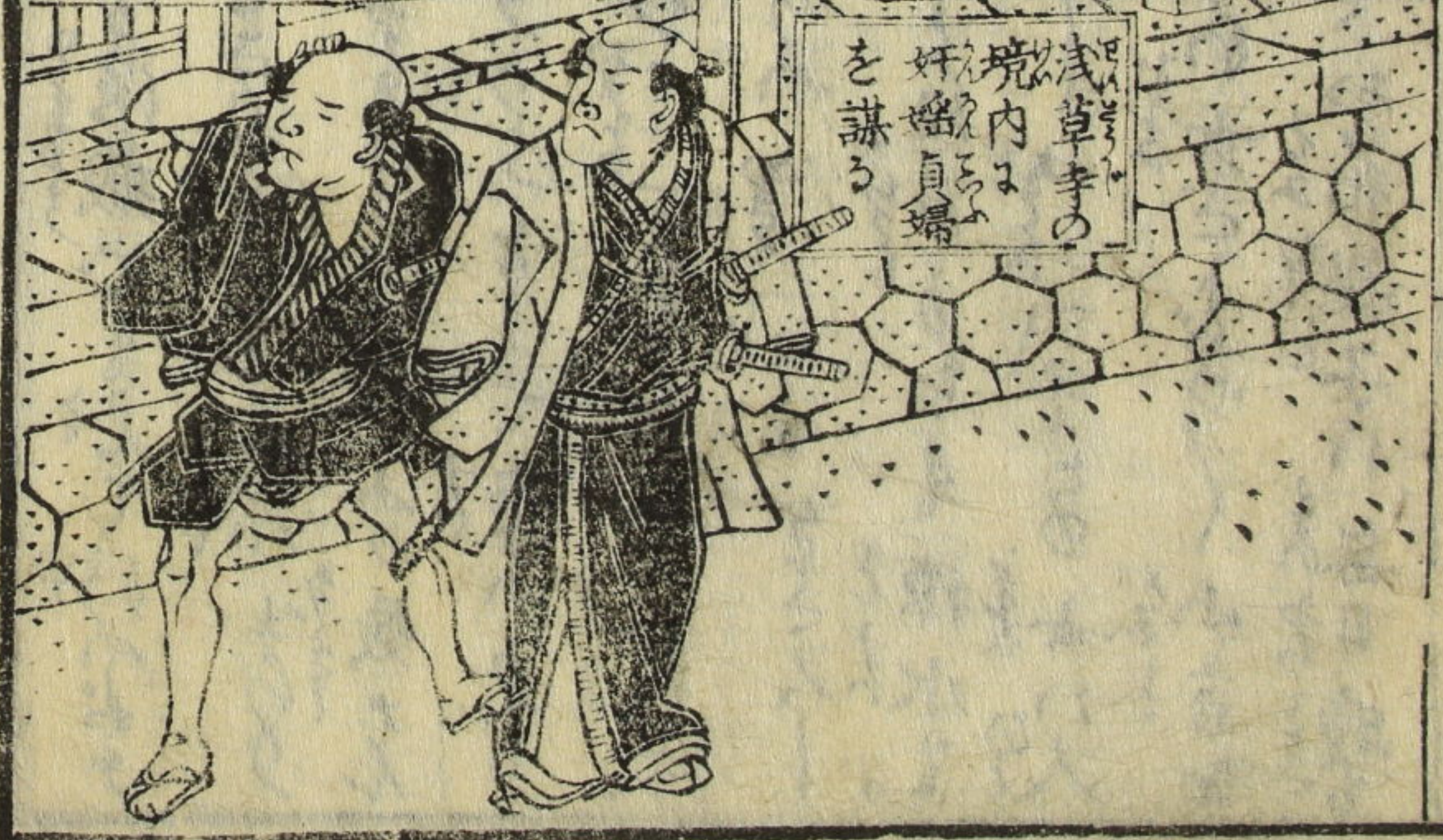
高尾外傳 卷之二



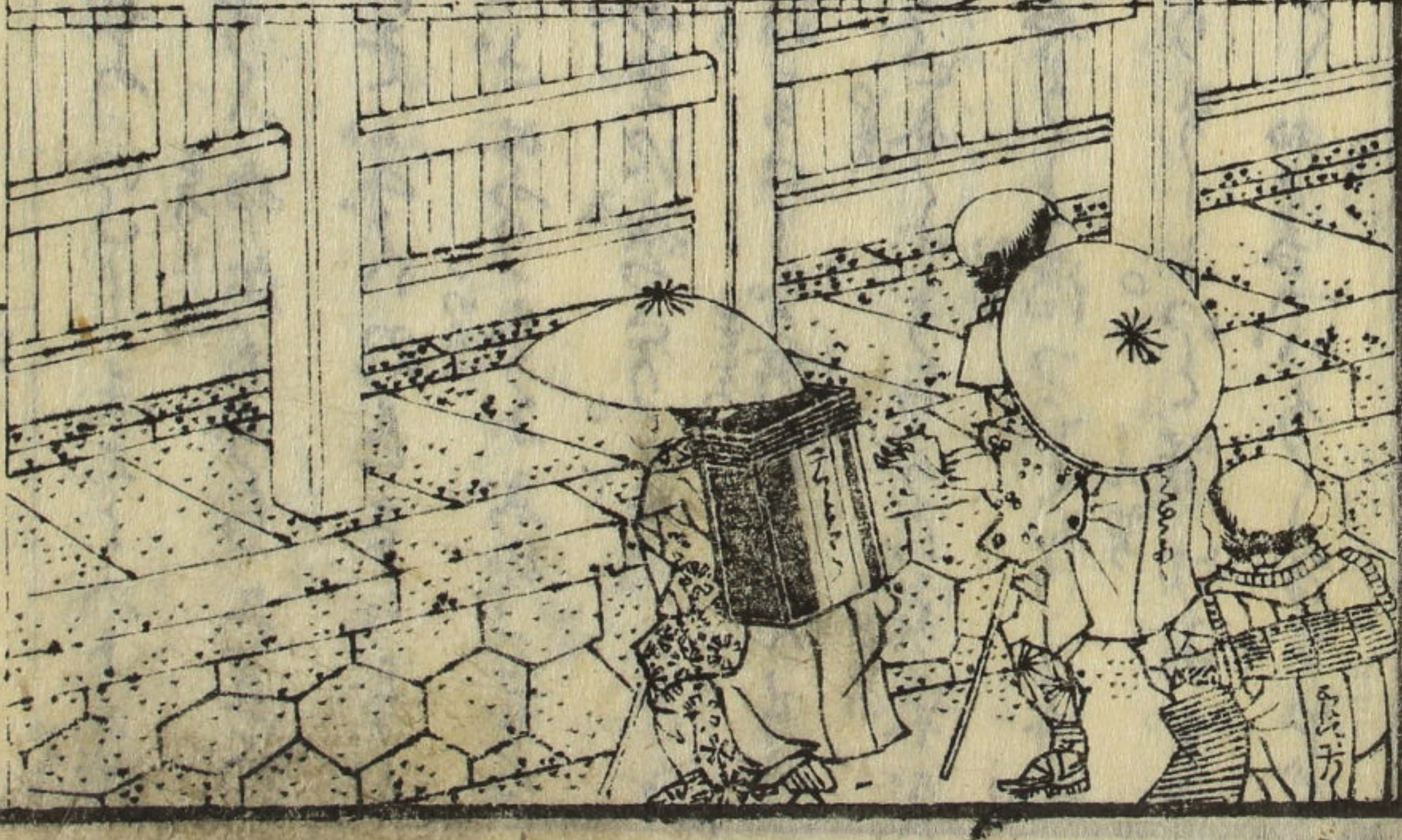
きであらう。さういふ事をぬきぬきとつらつら男おとこ。  
 うんといふもの。かきかきもいふもの。と年々としとし。  
 のさましに婢女めかけと相人あひては笑ひさやく向くら豫て言合せ  
 うつことなき色いろ。向坂むかしば甚内しんないの衣服いふく大小おほいせ立流たてながのりもとら  
 黒鴨くろがも草履取くさぢとりと供とも。蓮はすは仏前ぶつぜんへ賽まは然ぜんをあげいと高たから  
 くれへむむ観世くわんせいをさう家内うちうち安全あんぜん息いき文ぶん延命えんめい諸願しよくわん  
 下くだうぶゆ。トさうと十二文じふにぶんわくおまがゆる勝かち手の八百やっぴやく  
 めつしあがら并なみまつ横目よこめでか照てるか方かたをさうのくながむはた  
 か照てるハ一心いっしん不ふ乱らんよおんで居ゐるさうなむが。あつとも氣いきづつ子こ  
 太おほのーあがり。おろく母ははえんまのりまをうトいふよ。

「コサきものつらに。評判ひやうばんの力持ちからもちく漢藏かんざうでもいふてはるがま  
 あり。ハイどいでもよろあゆいどいでも信しんひすのり  
 けあつまして。えんまのものをとて取とりまゝしてハどより殿とのみを  
 ぶえまのりまゝとまをいどいでもさうううて出でふりり  
 ままさういふやどいどいでもせんうトいふれて。そまもそあでたれど。  
 かさんが見みさうあうとあゆむのふ。おん「イヤ、さういふ  
 ハあぢう病やまへまのりまゝととれた。かゆちも源水げんすいも。  
 おうねさ芝居しばいも。まのりまゝの見みまゝ。「マ、まの女めハ人ひと  
 のまんせつを無むそくする忌いみくしの女めどとあうく。小言こごんを  
 いひながら立たえりのぬ。あまよりと。お花はな親おや子こハ毎日まいにち時ときむ

ぐんずとんけのせーぐ丁度そ  
 の時刻ふあ角もあ角しきま  
 互にうやうやええれども詞をうく  
 べきあやもわうりけきむひま  
 おさぬあうらに七日満ずる日例  
 のごとくお祀り子ハ坊あぐん  
 前々ねづづきて。祈念しと居こ  
 るうち向坂もあやぐくまきり  
 却ししく念ぐりうち夏の日の  
 さらひとして天あうらにくれんり



一天墨とながりーうらごとく  
 立盆とろこびららどろろ降そぐ  
 二条沼の人くハ右往を往もちり  
 申くはあやあやの二人ハ傘  
 とりこさうとまは。いごの甘んと  
 空とるあいのうらふ。りちちるづ  
 ともはくぬよお花ハコトくあて  
 そんぬに遠い所でもあひ。どあ  
 すとー少降もあうとよあごうら  
 らのうらも拭てもうらつて。いそ













うさきくさくさうらひひきぬぐらゝののまきりやが居る  
 して母のち花きりのぞら あま 「アアの子ハさきぞあがこ  
 史まを岡と初いいのよの何の馬鹿なぢう一の  
 真ハちうともあひ一生流る事さよりのことさら他  
 人でいゝの従父同士の推時々の言号あややと  
 と之祝言せねばさえんにもたぐういことハあいの  
 よふうのむせとむせともなやくあまこの侍人の  
 さふよのトつとさ中らる事とあをちぢぢぢぢぢぢ  
 猿同前ちのさくかうくわうける あま 内ハま  
 ふ衣紋をつくらひきら あま 横目ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

中り。あまの顔のせねをらひ。エヘンくとまぢぢぢぢ  
 扇はうぞおひくま。

第五回

却説 茂太郎が後家お花ハ向坂甚内と斗畧を  
 あめーあまを彼人の物語と證據とましてお照が塔  
 とささあ某の夜ハいよく あま 網なりとささめくま  
 照ハまらちとまき言号の覚太郎が甚内なると  
 ハ夢 あま さらあさ あま 内ガ男ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 日その行ひの貪慾邪見あるにあらく あま ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 公の中に十分のうまひとて あま 奈何ハせんとなひひ







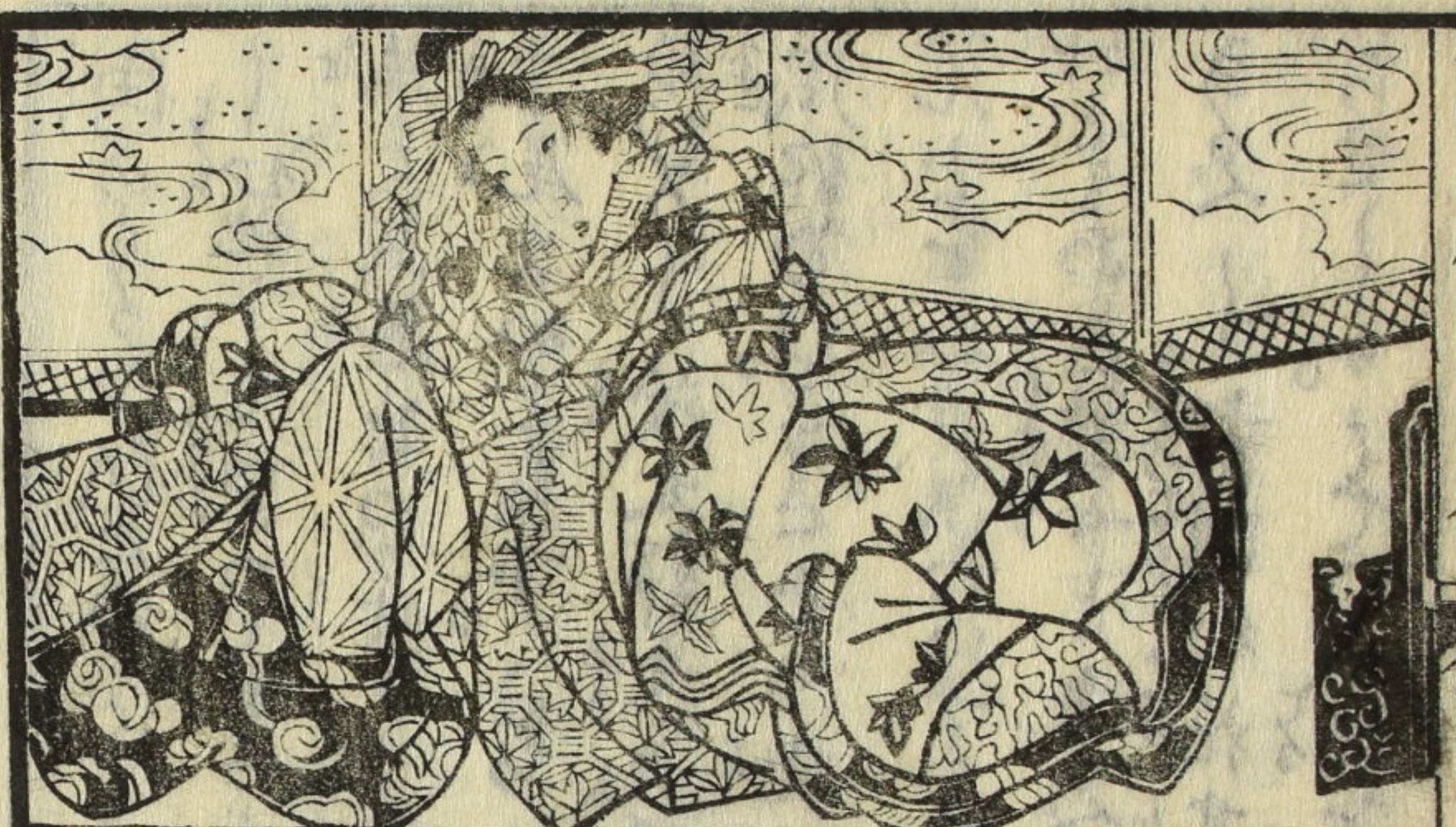
鉄腸負を  
全くして  
心自ら  
の根本



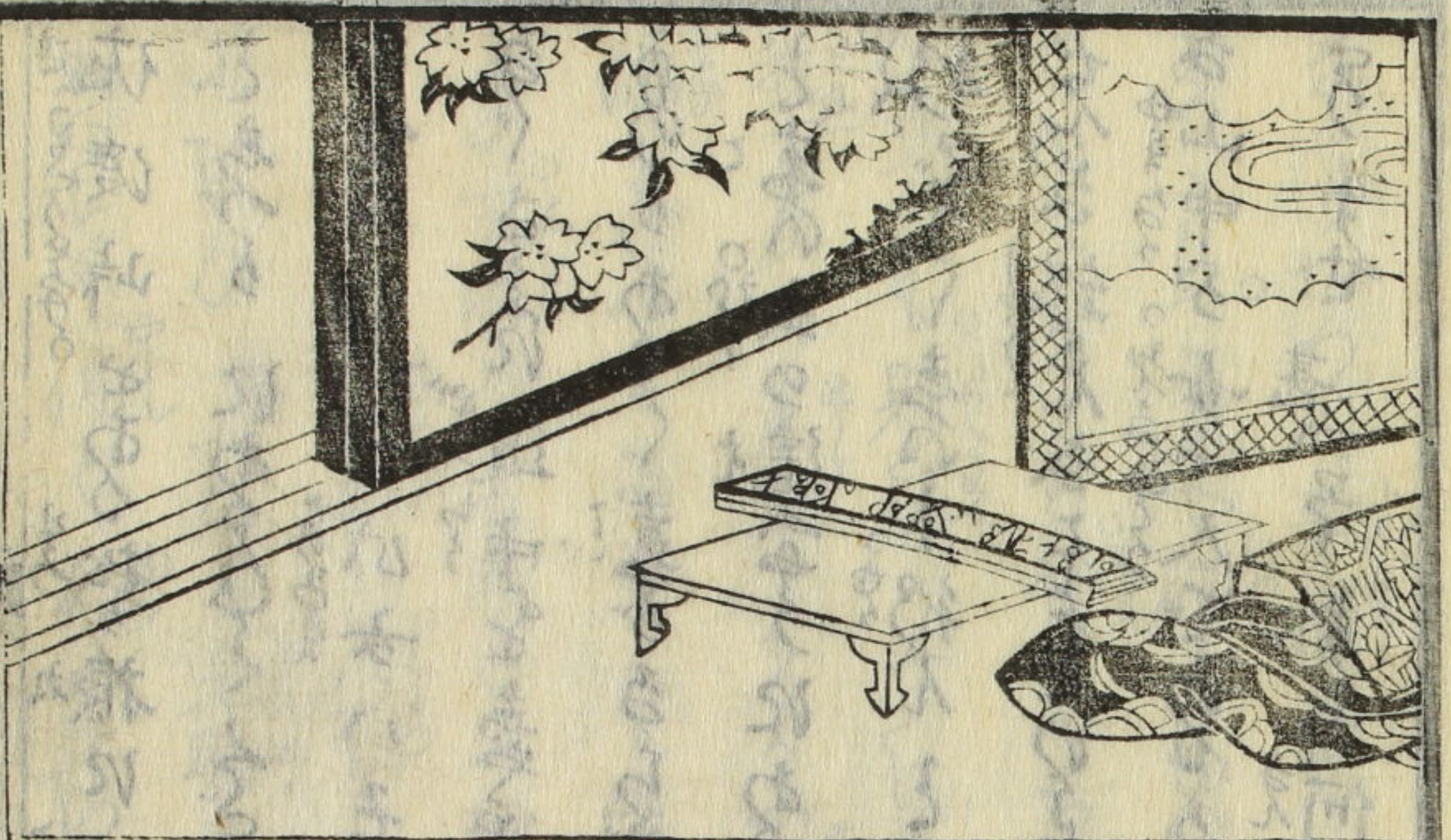








一トバ。そまよふまゝさるるぐの  
悪るのそまゝなるが今ハ其日を  
送りぬるやうになつたにぞ。お花ハ  
け時よりのお照を廊へ愛り  
よをそまよふくまゝて殊におそ  
らごち内にもつひくさるるぐ眼  
そのまよふお照にお意に〜居  
方我家も終あおつてま〜  
かりおれ只一個の娘さ勤奉公  
賣よふにま〜まおま



多りと毎日く怒つ泣つすつやど  
に。どんぬ  
てう〜るやと思へる後難を  
おまお花に向ひ上州草津あ  
此の知音もあまハ〜と  
もりも〜七活業をい〜るむべ  
〜共侶は旅粧をな〜  
ま〜折〜も六月のま〜に  
〜炎暑蒸がごとくお花ハ道  
あ〜足をとこま〜行な〜





る仕度うがへるやとせりて。お花かふらうびあかまは  
 茂次郎さぬふくありなる。今更なるも面目なれと  
 かから娘おとを為あまの塔なるならんとりい浪人者  
 貯福多きふとら迷ひえくのとく久更してまんま  
 塔にさうれど。驚いりて探とまのりその男にもあ  
 ぶねたま主人とせしむると。おん女の残さるるつ  
 つけ身とせしむる。是一生のこがぬまのそとより日  
 毎は淫淫にちけりてくくあひちり。今根に足さば海ハ  
 詮方多く。おとくを廓へ勤奉公をさく。果はさうくは  
 しく。とてあまうつと。草津へおんともろともい  
 へ

まを来たるけふ中。さうく上りけ谷へつたをてくる  
 得ん。とて。夫のむららんと。思ふがけりてうらと  
 い愛さすも迷る。おんおちりた。赤覺茂次郎ハ尚  
 も耳ふ口をよせ。茂シ多く。浪人の姓名ハトけりて  
 向坂多肉と。いふをけ世のいともいひ終ふさうくるり  
 たる。茂次郎ハ不便に。おひい居お捨かく。かゝるい狼の  
 飼食とならん。せめく。い死骸とけむりとなり。死骸の  
 厚とすし。いさきん。四下の木の葉と拾ひあつた。死骸の  
 むらりへ。後重ね。お火おの火と。うせ。おろと。燃さる。中空  
 へ。煙の西へ。さるびく。おぞ。極楽は生う。こがひる。と。數回。四

高尾女傳 卷之二

廿八

向すまが遠寺の鐘の音もすまでひびきあひまよそふふ  
 う。おくと茂次郎へおてるがまひひとなく一トまづ武江  
 へさうり兄が家のわらうりうらうらにわくまひと椽  
 朽く草やうくと生まげり昔のままうげのありのまづら  
 いとるあ昔見一妹が垣根のあはにるるとうらうら古哥  
 かに思ひひぞく懐古の懐ふとど漫ぶまゝあはまらうら  
 茂次郎へそれよりおぼが在家とさうとまてかひひ一が廓と  
 なるり聞くととらんそとどとまどこれのまづまへへの  
 とまやにながなむがまはさうとてのあらと一タうらうら  
 とどり行ふ堤八丁をさ衣紋坂を下り大門口よりまづあ例

のまがとひひなるりもあうらうら者も魏を天外とまをにるま  
 ありさるるまど茂次郎へ從來権真のまありまわがあま  
 のことを回すまらひまのやあおん似て者りまをつけ  
 るるるの向ふの方より連歩をうらうら外八文字の一個の  
 花魁對の先は新造老三板引板大勢うらまあめまらうら  
 にそめまどまらんがまめれたことりスハ評判の高尾の君  
 まらうらうらうらうらひらうらま三尊仏の四葉光まらうら  
 とまらひひまらうらうら有難やうらまらと人のあまらうら  
 びあまらうら茂次郎へまを聞高尾とらうら文治の昔世  
 ふ名高ま全盛の似城まらうら入畧うらまに聞つらま其名

と纏るものるらんと。さすかふもの  
 一人をかきよけ彼高尾との  
 入女をえるに。これまふづのもあつぬ  
 徒身女が照あつあけは且孩  
 且よりてび。そのあつたててふ  
 さある茶屋のいりてまふ茂次郎  
 ハ外面にさかき皆時待ちた高  
 尾ハ客のうらとも彼茶屋を立出  
 る三浦屋に入るに七尚茂次郎  
 ハあり人ふとさぐひ三浦屋まの



店の後に居る若者とまふを密に  
 高尾は遇んこととをさす若者  
 ハゆゆとていひながら動と高  
 尾につくる高尾は膝を別り茂次  
 郎を招く。あつてまふを照あつあ  
 て高尾ハその夜の客人のそ尾を  
 つらひ別り人あり茂次郎不對  
 面すに。うらりたをさすあ照が姿と  
 泪されらるむらりかろ其時茂次  
 郎ハ高尾よりむらひ一其方が廓あ

